

# レバノンでの支援活動

## 1

### 児童精神科の支援と教育支援



ブルジバラジネの小学生たち

レバノン南部にあるアイネヘルウェ難民キャンプには、5万人以上のパレスチナ人が住んでいます。このキャンプはレバノン軍に封鎖されて人の出入りが厳しく制限されているだけでなく、内部で様々な政治勢力が覇権を争っていて、しばしば武装対立が起きます。この夏も激しい衝突があり、キャンプ内およびキャンプ周辺に住む住民の多くが、非常に不安定な心理状態になりました。9月に武装対立が一時停止になった直後、多くの家族がキャンプの外側にある児童精神科のクリニックであるFGCセンターを訪れ、「ここに来る道が多少危険でも、センターに来るとほっとして安心する」と語りました。センターの開放スペースがシェルター的な役割をはたしているからです。

#### 地道な支援の成果

アイネヘルウェの衝突事件で、特にシリアから避難してきた子どもたちが受けた衝撃は大きく、FGCセンターへ駆け込む患者や待ちリストは再び増加の傾向にあります。シリアで両親を目の前で殺され、避難後は姉としか口を聞かず、ひどいうつ症状を抱えていたM君もその一人です。臨床心理士の献身的なカウンセリングの結果、無事に治療を卒業。春のワークショップに参加した時には、他の子どもと交流しながらほらかな笑顔を見せるまでに回復していまし

た。しかし8月に自宅付近で襲撃を目撃したことから、過去のトラウマが再起し、再び深刻なうつ症状となって、カウンセリングに通うようになりました。当初からずっと関わってきた臨床心理士は大きな衝撃を受けていましたが、その後、「心理テストを実施した結果、M君の状態は思っていたほど悪化しておらず、カウンセリングの成果が着実に定着したことが分かって、本当にホッとした」とうれしい報告がありました。地道な支援の成果です。

2013年夏に自殺未遂を2回行ったために当会とUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の支援により緊急入院した8歳の少年W君も、2年近くにわたるカウンセリング期間を無事終了し、以前は不登校であった学校にも通って、多くの友人を作ることができるようになり、無事に進級することができました。W君の姉もうつ病と貧血を抱えていましたが、同じくカウンセリングを通じてうつ症状を克服し、今年6



音楽セラピーがとても気に入った少女と母

月に実施された学校の進級テストではとても好い成績をおさめ、友人と共に快活に笑うようにまで成長しています。W君と姉に対する週2回の精神科医・臨床心理士によるカウンセリング、W君の父母に対する父親・母親ワークショップ、さらにはW君の家族全体に対するソーシャルワーカーらによる家庭訪問と、三段階にわたっての丁寧な介入によって、W君と姉は大きな快復を遂げることができました。FGCセンターでは、時間がかかっても家族関係の改善を含めた取り組みが子どもたちの将来を変えてきたと自負しています。センターの精神科医や臨床心理士は、基本的に子どものカウンセリングに特化しているため、子どもの兄弟や保護者に対しては、センター長やソーシャルワーカー、専門のボランティアたちが悩みを聞いて対応します。患者数や待機リストが増加したため、9月後半からは、ティーンエイジャーや学習障害児向けの各ワークショップ、母親ワークショップ、音楽セラピーなどにも取り組んでいます。

## 人生を切り拓いた若者

FGCセンターでは、このほかに発達障害や重複障害の子どもたちへの支援も続けています。これまでボランティアで活動を支えていた青年の一人が、明日からカナダに留学すると言いにきました。識字障害のために、国連の学校で教師や生徒からいじめを受けていたが、センターの支援で奨学金を得て特別な職業訓練校に転校できたため自動車エンジニアの才能を開花させ、ついにカナダの奨学金を得たそうです。新しい人生を切り開いた若者の照れた誇らしさに胸がいっぱいになりました。

その一方で、アイネヘルウェのあるサイダ地区でメンタルヘルス事業を行っていた大きな国際的医療団体が事業を突然中止した事が波紋を呼んでいます。地元の専門家によると、同事業では精神科医が3人もいて、多くの大人の患者が投薬治療を受けていたそうです。事業中止によって投薬が突然ストップして精神状態が悪化しているにも関わらず治療が受けられない状態にな

っていて、安易な投薬によって「薬漬け」にされた患者たちは、かえって危険な状態にさらされているそうです。レバノンでは、内戦の後遺症、治安状態や経済状態の不安定さから、難民だけでなく非常に多くの人々が精神安定剤や鎮痛剤を常用し、家計のかなりの部分を薬代が占めるとも言われています。

## はじめての教室

ブルジバラジネでは、9月より新規登録に訪れた子どもたちのうち、シリア内戦によってシリアでもレバノンでも一度も学校に通ったことのない子どもが15人以上見つかったので、この子どもたちの新規クラスを開設し、アラビア語・英語・算数の3科目を指導することとした。Tさんは14歳ですが、シリア内戦中は学校に行けず、レバノンに3年前に避難して後に父親が心臓麻痺で亡くなり、その後は母親の家事を手伝って過ごしていたために、一度も学校に行く機会がなかったそうです。

近隣の住民から補習クラスの評判を聞いて、母親が補習クラスに登録し、小さな子どもにまじって目を輝かせて授業に参加していました。「家の中で家事以外にすることもなく、この3年間、友達もいないまま過ごしてきた。こうして、教室に座って皆と一緒に学べるのがとても嬉しい」と話していました。補習クラスの開講前に、指導員やソーシャルワーカーが家庭訪問をしながら調査したところ、保守的なシリア人世帯の中には外出もめったにせず、地域の交流ネットワークに関わらずに生活していて、接触さえできない家庭もありました。シリア人の場合は登録すればレバノンの公立学校へ通うことが可能ですが、いじめの問題や制服代等を徴収されることを懸念して、保護者が登録しないケースも多いのです。



はじめて学校に来た14歳の少女(奥)



FGCセンターの庭に草花を植えた子どもたち。全員が問題を抱えている



手袋に目鼻や飾りを付けたバベット。自分の作ったバベットと対話しながら、気持ちを表現したり、客観的に見つめたりすることが目的

# レバノンでの支援活動

## 2

### 食糧支援と燃料支援



ワーベルキャンプの「シェルター」

シリアからの難民に対する国際機関からの支援は資金不足のため減少傾向にあります。WFP（世界食糧計画）は7月よりシリア難民に対する食糧支援額を半額にする（一人当たり月約1500円）と決定。さらにUNRWAは5月にシリアからのパレスチナ人に対する住居支援（一月当たり100ドル）の全面カットに踏み切りました。その結果、食糧や住居といった最低限の生活保障もままならない状況が発生しています。

当会ではレバノン東部のワーベル難民キャンプと周辺に住むシリアからのパレスチナ難民約630世帯を対象に食糧配布を実施しました。米、レンズ豆、大豆、パスタ、トマト缶、ツナ缶、肉缶、サラダ油、砂糖、ザアタル（ハーブの粉、パンにつける）、お茶など現地の食卓にあがる主食を取り入れると同時に、子どもたちの好物の「ハラウ

エ」というスイーツも加えました。配布は一日200世帯ずつ5時間かけて実施しますが、配布開始日には1時間も経たないうちに100世帯以上が配布物を受け取りに来ました。隣人に食糧を分けてもらったり、一日一度の食事しか確保できない家族が多い中、配布は食糧を確保する貴重な機会です。

### 越冬にむけて

配布物を受け取ったSちゃん（シリアのヤルムーク難民キャンプから避難してきたパレスチナ人の4年生）の家庭を訪問しお母さんに聞きました。「住居支援が断られたため、食糧支援を住居費に充てなければならず、食糧がなかなか確保できません」。育ち盛りの3人の子どもを抱えるお母さんは、「それでも子どもたちには何か食べさせないと。毎日パンとザアタルだけというわけにはいかないし。シリアではお肉で作っていたけれど、ここではジャガイモと小麦だけで「クッベ（揚げた肉団子）」を作って食べさせています。」

Sちゃんは当会が支援する「子どもの家」の補習クラスに通っていました。補習クラスでは、家庭の食糧事情の厳しさを考慮して給食を提供しています。「補習クラスの一番の楽しみは給食だったの。お家では食べることができないお肉やピザ、クナフェ（ア



倉庫を改造したシェルター。隙間から雨水だけでなく蛇やネズミが入ってくる。窓にはガラスが無く、冬は凍死の危険がある

ラブ風のチーズ菓子)を食べることができたのよ」と話すSちゃん。今学期の補習クラスは1~3年生を対象としているためSちゃんは補習クラス卒業です。1・2年生クラスに通う妹、弟が「うらやましい」と言います。

これから冬を迎えるなか、多くの家族から暖房用の燃料確保に対する心配の声が上がっています。冬季はマイナス10度にまで冷え込むこともあり積雪も多いワーベル。去年は貴重な食糧を売ってでも燃料を確保したと話す家族が多く、Sちゃんのお母さんも「食糧はどうにもならなかったらパンとザアタルだけ食べても生きのびていける。でも、暖を確保する手段がなかったら私たちは凍死してしまうわ」。当会では、ワーベルやその周辺地域で1000世帯以上への燃料配布を予定しています。

## 将来への扉

国連機関の相次ぐ支援打ち切り・削減が表明される中、9月新学期を前にUNRWAは資金不足を理由に学校が開校できない可能性があるとして発表しました。この知らせを聞き、キャンプの子どもたちは大きなショックを受けました。「将来は痛みを抱える患者さんを助ける歯医者になりたい」と話していたSちゃん。お母さんも「シリアにいたころは私にも夢や希望があった。私は高校まで通い裁縫技術を学んだわ。その技術を生かして仕事だって手に入れることができた。カーテンや子ども服などを作ろうとか、小さな希望があった」と話し、「学ぶ機会さえも奪われた子どもたちは何を励みに生きていったらよいの？紛争で住み慣れた家を奪われ、仲良くしていた友達とも離れ離れになり、十分な食糧もない……せめて将来への希望だけは抱かせてやりたい」と教育の重要性を訴えていました。(結局、学校は少し遅れたものの開始されました)

9月30日にニューヨークの国連本部前にパレスチナの国旗が掲げられた、とレバノンのメディアも速報で伝えました。この知らせに、ワーベルの子どもの家センター長のアジザさんは「パレスチナ人はもう70

年近くも先が見えない真っ暗な暗闇の中を生きてきて、国旗掲揚は私たちにとってキャンドルの光のようなもの。子どもたちが光を見失わないように、彼らの将来や希望まで奪わないで」。

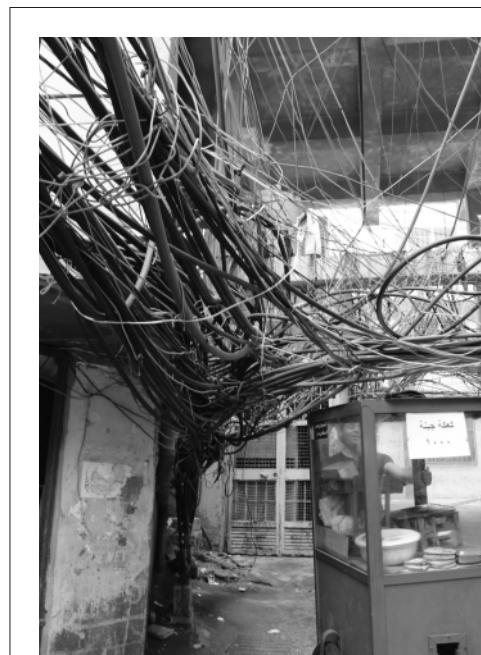
長期化する難民生活の中で、子どもたちの将来への扉を一つでも多く開けていくことが、私たち支援者に求められている役割だと感じています。



週に3回ある給食は子どもたちの体と心を温める



越冬支援の一環として、乳児とお母さんへの育児用品の配布や育児支援も開始した



### 頻発する感電事故

蜘蛛の糸のような電線は難民キャンプの特徴だが、感電によって毎年非常に多くの人たちが亡くなっている。8月にはブルジバラジネで18歳の青年がカバーのとれた電線に接触して死亡。ほかにも工事用の鉄パイプを運んでいた作業員2人、缶ひろいをしていた子どもと、その子を助けようとした父親などの事故が相次いでいる。10月にはシャティエラでも雨上がりの日に3人が死亡した。家庭内の感電による事故も多く、死と隣り合わせの日常だ。